

当院における早期子宮体癌に対する ロボット支援下子宮全摘術の臨床成績

四元 房典 伊東 智宏 宮原 大輔
吉川 賢一 重川浩一郎 宮本 新吾

福岡大学医学部産婦人科学教室

要旨：はじめに：早期子宮体癌に対する腹腔鏡下子宮全摘術 (total laparoscopic hysterectomy, TLH) が 2014 年 4 月、ロボット支援下子宮全摘術 (robotic-assisted hysterectomy, RAH) が 2018 年 4 月に保険収載となった。当院は早期子宮体癌に対する RAH を 2018 年 10 月から導入しており、2021 年 5 月までに 9 例を経験した。当院で同時期に行った早期子宮体癌に対する TLH の臨床成績を後方視的に比較検討した。

対象と方法：RAH では da Vinci Xi Surgical System を使用し、導入時には経験豊富な指導者を招聘のうえで開始した。2018 年 10 月から 2021 年 5 月までに術前推定子宮体癌 IA 期に対して行った RAH 9 例と TLH 10 例の手術時間、子宮摘出時間、術中出血量、術中術後の合併症、短期的な腫瘍学的予後について比較検討を行った。

結果：RAH 群と TLH 群の間に年齢と BMI に有意差はなかった。RAH 群と TLH 群で周術期成績の中央値を比較すると、手術時間 (RAH 群：343 分 [範囲：184-443] vs. TLH 群：277 分 [範囲：240-373])、子宮摘出時間 (175 分 [106-257] vs. 131 分 [85-212])、術中出血量 (70g [1-672] vs. 54g [1-570]) 及び術中術後の合併症 (RAH 群：11.1% (1 例)、TLH 群：10.0% (1 例)) に両群で有意差を認めなかった。RAH 群、TLH 群ともに開腹移行症例はなかった。最終病理診断は RAH 群において 2 例で IB 期、1 例で II 期、TLH 群において 3 例で IB 期、1 例で III B 期であった。

結論：当院では早期子宮体癌に対する RAH を安全に導入することができた。周術期成績は TLH と同等の成績であったが、当院では早期子宮体癌に対する TLH は 2016 年 8 月から導入しているため、経験症例数にほとんど差がなかったためと考えられる。今後は婦人科悪性腫瘍に対する低侵襲手術はロボット支援下手術への移行が予想されるが、長期的な腫瘍学的予後の検討などさらなる検証を行う必要がある。

キーワード：ロボット支援下手術、腹腔鏡下手術、子宮体癌、子宮摘出術